

永野小学校・学校だより(2月)

消極的脚色

副校長 小泉啓治

例年よりも暖かな冬が続いています。学校の玄関前の白梅は1月10日に、そして昨年子どもたちの募金で購入した紅梅がその2週間後に開花しました。春の訪れの早いのは嬉しいのですが、これが地球の温暖化の一現象なのだろうかと思うと複雑な気持ちにもなります。

この季節になると必ずと言っていいほど思い出すことがあります。もう40数年前の小学校低学年の頃のことです。冬のある日、友達と学校の斜面になった所で遊んでいました。ふざけてもみ合っているうちに下に落ち、左の肩を強く打ちました。結局このために左の二の腕を骨折してしまっただけですが、家に帰ってから自分もふざけていてそういうことになったのに、家族には、「斜面を下りてきた上級生に押されて落ちた」という言い訳をしたことを覚えています。昔のことだからか、初めから信じられていなかったからか、押しただけが誰だということは誰も問題にしませんでした。今から考えても顔が赤くなるような思い出です。

また、こんなことも思い出します。我が家の子どもたちが小学生の頃、ファミコンが大流行しました。息子たちも買って欲しいものですから、毎日母親にねだっていました。その時の言葉が、「友達もみんな持っているのに……。」でした。よく聞いてみると「みんな」というのはせいぜい3人に1人ぐらい。つまり3割ちょっとでみんな(10割)なのです。

自分の数少ない経験からだけでものを言うのは危険かもしれませんが、これらのことから子どもはずいぶん『嘘』をつくものだと思います。『嘘』という言葉の意味合いが強すぎるとするならば、「自分にとって都合の悪いことには目をつむり、都合のよいことだけを言う傾向がある」と言えばどうでしょう。あるいは、「自分にとって都合の悪いことは消去(意図的でないにしても)

する」ようなことはないでしょうか。このことは「消極的脚色」という言葉で言えるように思います。(もっともこれは子どもだけではなく、私たち大人も同じかも知れません。自分も積極的にみんなを誘っておきながら、「いやあ、みんなで行こうという話になって断れなくて」などとよく言いますから。)

もしそれが分かっていたら、やはり大人としては自分の子どもが言うことだけを無条件に信じるわけにはいきません。相手の話や周囲にいた人の意見も集め、事実はどうなのか、客観的な判断がとても大切ではないかと考えます。我が子や我がクラスの子どもの言い分を100%信じたいのは誰でも同じでしょうが、残念ながらそうもいかないところもありそうです。

ここまで考えると、私たち大人は、普段から我が子やその友達についての意見や情報を集められる人間関係・ネットワークを作っておくことがいかに大切かということになります。

『うちの子はこう言っているけど、その通りかな?』

『近くにいたそうだけど、何か知っていることある?』

このような会話が気楽にできること。親同士にこんな関係があることが私たちが子どもを客観的に見ることに繋がりますし、何といても子ども自身が『脚色』のない、ありのままの自分の姿を見せることに繋がるのではないのでしょうか。

『消極的脚色』を積極的な事実の発信に変えていきたいものです。